

人間の身は、その人のさまざまなはたらきを司るものですが、それはあたかも塵が風に吹き飛ばされるように周囲の事情に影響されてしまいます。このように、人間の中には六根（眼・耳・鼻・舌・心・身）が好き放題に暴れ回っていて制御できない状態なのです。もし、それらの悪を滅して、永久にもろもろの煩惱やわずらいから離れ、いつも真に静寂なる気持ちでおり、安樂にして淡淡とした心境に成りたいと欲するならば、当に大乘の教えを誦誦して、もろもろの菩薩を生み出す母体となる徳に思いを凝らす必要ありません。

風塵にくるしみながら、さすらっていた旅人が、いざ帰路につき我が家に帰って見ると、今まで歩いてきた所にこそ旅の真価（物や人のもつ真の価値や能力）があったと気づく。かぐわしい草が、川辺に叢生し（重なったりねじれて生えている）桃や李（すもも）が乱れ咲き、見るもの聴くもの、すべて故郷の春にそっくりと感じられた。

回光返照は大正四七巻 問如何是西來意。臨濟云く、「你言下に便ち自ら回光返照して、更に別に求めず、身心の祖仏と別なつゆのを知るを、當下に無事なるを、方に得法と名づく。

問い、「初祖が西からやってくて来た意図は何ですか。」  
臨濟云く、「もし何かの意図があったとしたら、自分をなぞ教つていさげなす。

問い、「なんの意図もないのでしたら、どうして二祖は法を得たのですか。」  
臨濟云く、「得たというのは、得なかったとどういふことなのだ。」  
問い、「得なかったのなら、その得なかったとどういふこの意味は何でしょうか。」  
臨濟云く、「君たちがあらゆることごとく求めまわる心を捨てきれぬから」そんな質問をする」のだ。  
だから達磨大師も言つたにやないか、

『この一言に、君たちが自らの光を内に差し向けて、もう外に求めることをせず、自己の身心はそのまま祖仏と同じであると知って、即座に無事大安樂になるのができたら、それが法を得たといふものだ。』  
およその大意は、仏性を他にもとめぬ。生まれつき、宿業は皆妄想より生ず、尽十方界真実の在り方に還る。

生活態度の転換。只管打坐。自我の放棄。正しい坐相を維持する。宇宙の生命活動。仏の在り方を生き続ける事。

一切業障海 皆從妄想生 若欲懺悔者 端坐念實相 衆罪如霜露 慧日能消除 是故應至心 懺悔六情根

一切の業障海は、皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端坐して実相を思え。衆罪は霜露の如し。慧日能く消除す。是の故に至心に。六情根を懺悔すべし。

すなわち、一切の行ないの過ち（業障）はみな、ありもしないことをあると思う妄想から起るのです。そして自分の業障を懺悔して思うなら、静かに坐って諸法の実相を深く想い念じることに

会え、たまたま消滅してしまふのです。ですから、ひたすら実相を思うことにより、六情根を洗い

清めなければなりません」 仏説觀音菩薩行法經 正壽寺住職 吳定明合掌